

4. 脳動脈瘤に対するendovascular techniqueの有用性

(脳神経外科学 *筑波大学臨床医学系脳神経外科)

橋本 孝朗、伊沢 仁之、稲次 忠介、中島 信幸、
松本 功、伊東 洋、*兵頭 明夫

近年の血管内手術の進歩の結果、従来直達手術が困難であった動脈瘤の治療が少ない侵襲で可能な場合が多くなってきた。我々は平成8年8月までに22例の脳動脈瘤に対して血管内手術を施行したので、その有用性について報告する。

対象は29~74歳、平均54.5歳、男性9例、女性13例であった。初発症状はクモ膜下出血が13例、mass effectによる脳神経麻痺5例、その他が4例であった。結果は、クモ膜下出血の13例で、GRが6例、MDが1例、SDが1例、VSが2例、severe vasospasmで3例が死亡した。mass effectを呈した5例では3例に症状消失を、2例に症状の改善をみた。その他の4例は全て完治した。

endovascular techniqueは全身状態不良あるいは外科的なアプローチが困難な動脈瘤に対して、侵襲が少なく非常に有用であると考えられた。

5. 肝静脈再建を行った肝部分切除の2例

(外科学第三講座)

宇田 治、青木 達哉、葦沢 龍人、土田 明彦、
青木 利明、安田 大吉、増原 章、浅見健太郎、
長島 一浩、小柳 泰久

転移性肝腫瘍2例に対し、肝部分切除及び肝静脈再建を行い当施設で行った1例に関し検討した。症例は67才男性、一年前に胃癌で幽門側胃切除を施行後、肝S8に腫瘤陰影を認め、転移性肝癌の診断を得て入院。諸検査で肝予備能の低下を認め、右肝静脈は腫瘍により浸潤、圧排を呈していた。手術は残存肝機能の温存を図るために、肝部分切除及び、右肝静脈の再建を行った。右肝静脈は直接端々吻合が不可能であったため、右外腸骨静脈を自家グラフトとし再建を施行した。術後の肝機能をGOT、GPT、ChE、動脈ケトン体比で検討し、術後第五病日で肝機能が正常化した。肝静脈再建は、切除部位、肝予備能により、残存肝機能の温存を考慮し、積極的に行うことが望ましいと考えられた。

6. 上肢・下肢の加速度脈波の比較

(中央検査部 *臨床病理学)

西平 正、尾形 申武、宇津木道弘、
*福武 勝幸

『目的』 外来通院中の患者を対象として、加速度脈波検査を上肢・下肢に施行し測定部位による差を検討した。

『結果』 上・下肢間においては、c/a ($r=0.25$) d/a ($r=0.32$) e/a ($r=0.30$) 加速度脈波係数 ($r=0.34$) の相関を認めた。波高比を比較して上肢に比べ下肢においてb/aは低値 ($p<0.01$) を示し、d/aは高値 ($p<0.01$) を示した。年齢においては、上・下肢共にb/a (上肢 $r=-0.31$ 下肢 $r=0.26$) e/a (上肢 $r=-0.46$ 下肢 $r=-0.22$) 加速度脈波係数 (上肢 $r=-0.31$ 下肢 $r=-0.26$) の相関を認めた。しかし、一般的に血圧との相関が言われているが、今回は外来にて血圧治療中の患者が多く、有意な相関は認めなかった。

『考察』 加速度脈波は、血管の伸展性や機能的壁緊張、器質的壁硬化等を反映すると言われており、上肢に比して下肢のb/aが低値であったことは、下肢において血管壁の伸展性が保たれている可能性が示唆されていると考えられる。今後、患者の個々の病態・治療状況など考慮し検討したい。

7. 帯状疱疹および疱疹後神経痛に対する

リポPGE₁製剤の検討

— 加速度脈波を用いての効果判定 —

(皮膚科学)

奥田 知規、平田 雅子、大井 綱郎、古賀 道之

近年、帯状疱疹および疱疹後神経痛に対して、リポPGE₁製剤の投与が有効との報告がされている。しかし、その有効性を判断する基準がないのが現状である。そこで、加速度脈波計を用いてその有効性を客観的に判定できないかを検討した。その結果、有効群、コントロール群と無効群では点滴前の測定値に対する点滴後の変化率において、有意な違いが認められた。本法は疼痛軽減のために使用するリポPGE₁製剤の治療効果および薬剤の有効性の判定を、数値的解析により客観的に行う方法になり得ると思われる。